

令和元年6月27日現在

機関番号：34522

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K01054

研究課題名(和文) 能動的学習で引き出される「学生の眼差し」に基づく「質保証のための評価指標」の開発

研究課題名(英文) Development of Evaluation Index for Quality Assurance based on Students' Viewpoints drawn by Practicing Active Learning

研究代表者

辻 高明 (TSUJI, Takaaki)

流通科学大学・商学部・特任准教授

研究者番号：00454603

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、大学教育をテーマとするアクティブラーニング(能動的学習)を実践することにより、学生の大学教育や大学の授業への深い視点や思考を引き出し、それら「学生の眼差し」に基づく「質保証のための評価指標」の開発方法を提起した。具体的には、「学生コースバトル」という実践から、学生の「授業の評価指標」を明らかにし、また、「大学教育改善サロン」という実践から、学生が考える「大学教育で調査すべき事項」を明らかにした。本研究により、質保証に寄与するステークホルダーとしての「学生」という視座を喚起し、今後の質保証への学生参加を促した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

近年、大学教育の質保証への社会的要請が高まっている。従来の大学教育の質保証の取組としては、外部評価機関が策定した評価基準に基づく評価や、学内の教職員が実施する授業評価アンケート、IR(Institutional Research)による学生調査が中心であった。そして、「学生」は教育サービスの受け手として、専らそれらアンケートや各種調査に回答する受動的な存在に過ぎなかった。本研究は、学生参加による質保証の方法を提案している点に意義がある。また、大学教育にサービス学的な観点を取り入れることで、従来、教育学分野が中心であった評価・質保証分野を学術分野的に拡張させる点にも意義がある。

研究成果の概要(英文)：In this research, I have proposed the method for developing of evaluation index for quality assurance based on students' viewpoints. For that, I have adopted the method to draw out students' deep perspectives and needs on university education by practicing active learning. In particular, I have clarified that the evaluation index of University class through the practices of course battle by students. And, I have identified the items to be investigated in university education through the practices of students' salon for improving university education. Through this study, I have pointed out the importance of student participation in quality assurance of university education.

研究分野：教育工学

キーワード：学生参加型質保証 アクティブラーニング 学生の眼差し 大学教育の改善 評価指標

1. 研究開始当初の背景

大学教育の質保証は重要検討課題である。とりわけ、認証評価等、外部の認証評価機関の評価基準による評価だけでなく、大学内部で評価項目・観点を設定し、教学活動を自律的に評価・改善していく内部質保証の取組が重視されていた。各大学でも、従来からある授業評価アンケートのみならず、IR (Institutional Research) を行い、自大学の教学状況を把握して内部質保証に努めはじめていた。多くの大学の場合、授業評価アンケートの評価項目は教務担当の教職員が設定し、IR のリサーチクエストは評価担当の教職員が設定していた。すなわち、評価指標は教員、職員により設定され、「学生」は教育サービスの受け手として、専らそれらアンケートや各種調査に応答する受動的な存在に過ぎなかった。しかし本来、大学構成員でもある学生が参画する内部質保証の方法の検討も必要不可欠であった。

2. 研究の目的

本研究は、大学教育をテーマとするアクティブラーニング (能動的学習) により、学生の大学教育や授業への深い視点や思考を引き出し、それら「学生の眼差し」に基づく「質保証のための評価指標」の開発方法を提起することが目的である。具体的には、まず、(1)「学生コースバトル」という実践から、学生の「授業の評価指標」を明らかにし、それらを項目として構成し「学生版・授業評価アンケート」を作成する。次に、(2)「大学教育改善サロン」という実践から、学生が考える「大学教育で調査すべき事項」を明らかにし、それらを指標として項目を構成し「学生版 IR リサーチクエスト」を作成する。本研究の推進やその具体的成果物の提示により、質保証に寄与するステークホルダーとしての「学生」という視座を喚起し、今後の質保証への学生参加の促進を目指す。

3. 研究の方法

本研究で実践するアクティブラーニングは大きく (1)「学生コースバトル」と (2)「大学教育改善サロン」の2つである。

(1) 学生コースバトル

実践概要

学生コースバトルは、学生の授業を選ぶという行為から析出する要求指向のアクティブラーニングである。それは、登壇者となる学生が「自分のお薦めの授業 (以下、お薦め授業)」を一つ選択してプレゼンし、オーディエンスとなる他の学生が、どの授業が最も魅力に感じたかで投票を行い「チャンプ授業」を選定する実践である。

データの収集と分析方法

本研究では、秋田大学と京都大学で「学生コースバトル」を連続的に実践し、学生の「授業の選定理由」を明らかにするためのデータを収集する。すなわち、学生の「授業の評価指標」を、学生コースバトルにおいて、登壇学生が「なぜ、その授業を選んだのか」、観客学生が「なぜ、その授業に投票したのか」という「授業の選定理由」により明らかにする。具体的には、実践終了後、毎回、学生らにリフレクションシートへの記述を求める。そして、リフレクションシートの記述文を以下の3つの手順で分析する。まず、ステップ1では、各学生の「授業の選出理由」の析出する。具体的には、登壇学生がそのお薦め授業を「選んだ理由」、オーディエンス学生がそのお薦め授業に「投票した理由」といった「授業の選出理由」が分かる記述を全てピックアップする。次に、ステップ2では、類似する「授業の選出理由」のグルーピングする。具体的には、ピックアップした「授業の選定理由」の中で、類似するものをまとめて、グループを作成する。最後に、ステップ3では、各グループのラベリングによるカテゴリーの生成する。具体的には、作成した各グループに名前を付けて、その内容や性質を特定する。ラベリングされたグループをカテゴリーと呼ぶことにする。

(2) 大学教育改善サロン

実践概要

大学教育改善サロンは、学生たちが、現在の大学教育の問題や改善策を考える解決指向のアクティブラーニングである。それは、教育再生実行会議の提言や中央教育審議会の答申を利用して、学生が、個人検討として事前ワークシートを作成し、その後、グループ内検討、グループ間検討を行う実践である。まず、「1. 個人検討」では、予め配付された提言や答申の概要版や抜粋を読み、各自が「テーマへの問題点、原因、解決案」について自身の考えをまとめ、事前ワークシートを作成する。次に、「2. グループ内検討」では、グループ内で其々の事前ワークシートの内容を共有し合い、それらをまとめて、グループとしての意見や主張をまとめ、提案書を作成する。最後に、「3. グループ間検討」では、グループで作成した提案書をもとに、グループ間でネゴシエーションもしくはディベートを行う。ネゴシエーションの場合は、各グループで合意提案書を作成する。

データの収集と分析方法

本研究では、京都大学と秋田大学で「大学教育改善サロン」を連続的に実践し、学生が考える「大学教育で調査すべき事項」を明らかにするためのデータを収集する。具体的には、学生の「個人ワークシート」、ネゴシエーションやディベートにおいてグループで作成する「提案書」及び「合意提案書」を収集する。分析方法としては、学生が実践中に設定した現在の大学教育の「問題」を書き出し、頻出する「問題」の内、類似したものをまとめる。そして、まとめたものを、学生の問題意識が高い解決すべきテーマとし、調査項目の形式で文章化する。

4. 研究成果

本研究の成果は大きく以下の3つにまとめられる。

(1) 学生コースバトルの連続実践の結果から得られた学生の「授業の評価指標」

秋田大学での教養教育科目「大学の明日をみんなで創る」、京都大学での大学院科目「戦略的コミュニケーション 세미나」で学生コースバトルを連続的に実践した。そこで得られた合計332件の学生のリフレクションシートの記述から「授業の評価指標」を分析した結果、全部で17のカテゴリーが導出された。それらは「アクティブラーニング型授業」(51件)、「体験型学習」(27件)、「授業法」(25件)、「もともと関心のある内容」(24件)、「実用的で将来役立つ内容」(22件)、「関心を喚起される内容」(21件)、「日常生活で活かせる内容」(20件)、「先生」(18件)、「非日常性」(18件)、「留学生や異文化との交流」(17件)、「社会問題、時事問題を扱う」(9件)、「風変わりな内容」(8件)、「単位取得が楽」(8件)、「ゲストの体験談が聴ける」(7件)、「何となく楽しそう」(7件)、「プレゼンが上手かった」(12件)、「不明」(38件)という17のカテゴリーであった。

全カテゴリーにおける件数の上位1番目が「アクティブラーニング型授業」(51件)、2番目が「体験型学習」(27件)であり、学生らは活動や体験が中心の授業に価値を置いていることが分かった。逆に言えば、本結果は、現状では、そうした方法の授業が少なく、無いものねだりの心情が表れているとも捉えられよう。そして、件数の3番目が「授業法」(25件)である。その結果も合わせると、上位3番目までは授業の方法に関するカテゴリーであり、学生らは授業の内容よりも授業の方法に価値を置く傾向があることが分かる。

次に、件数の多い4番目以降は、授業の「内容」に関するカテゴリーが続いている。まず、「実用的で将来役立つ内容」(22件)、「日常生活で活かせる内容」(20件)など、将来の仕事や現在の生活において有益な内容の授業を求めていることが分かる。さらに、「関心を喚起される内容」(21件)、「非日常性」(18件)、「社会問題、時事問題を扱う」(9件)など、知的好奇心を高める、或いは社会の動きに関心を寄せる大学生らしい姿も確認できる。

最後に、「単位取得が楽」は僅か8件であった。もちろん、本実践は正課の授業内で行っており、教員(著者)もいる前で「楽勝科目がよい」などとは言いにくい面もあっただろう。しかし、332件の内の8件である。少なくとも、近年の学生たちにとって楽勝科目であるかどうかは、授業を選ぶ上でそれほど大きな価値基準になっていないことは示唆された。

(2) 大学教育改善サロンの連続実践の結果から得られた学生が考える「大学教育で調査すべき事項」

秋田大学での教養教育科目「大学の明日をみんなで創る」、京都大学での大学院科目「戦略的コミュニケーションセミナー」で大学教育改善サロンを連続的に実践した。そして、20グループ以上分の実践データを集積した。

まず、ネゴシエーションの実践例としては、「大学教育の質を向上させるためにどうすればよいか」というテーマを設定し、学生らに教育再生実行会議の第3次提言「これからの大学教育等の在り方について」の概要版の資料として与え、それを読んで事前ワークシートを作成するよう求めた。そして、事前ワークシートをもとに、グループを3つ構成して、3つのグループが、大学教育の問題と質の向上させるための「解決案」を話し合い、自グループの「提案」をまとめた。そして、3つのグループ間で「提案」のについてネゴシエーションを行った(図1)。そこでは、どちらの相手グループと合意すると当初の提案を高めることができるかを基準に、グループ間での交渉を実施した。結果として、2つのグループ間で合意が成立し、1つのグループは交渉が不成立であった。リフレクションシートを分析した結果、学生らは本実践を通して、現在の大学教育の問題点や原因について多角的な視点に考え、それを改善するための解決案についての考えを深めていることを確認した。

次に、ディベートの実践例としては、「大学でアクティブラーニングを推進するためにはどうしたら良いか」というテーマを設定し、学生らに、教育再生実行会議第7次提言「これからの時代に求められる資質・能力と、それを培う教育、教師の在り方について」におけるアクティブラーニングに関する記載やデータの抜粋を資料として配付し、それをもとに事前ワークシートを作成するよう求めた。そして、学生らを3グループに分け、2つのグループがディベートを行い、1つのグループは判定チームとした。対戦した2つのグループには、グループ内で、アクティブラーニングを推進するために求められる「解決案」と「具体策とその理由(3つから5つ)」を考え、「提案書」を作成するよう要求した。また、判定チームには、判定のための

基準・観点を5つ以上書き、判定方針書を作成するよう求め、ディベートの優劣を判定させた。リフレクションシートを分析した結果、基本的にはどの質問項目でも肯定的な反応が見られ、学生らが本実践に興味を持ったこと、そして、熱心に取り組んだことを確認した。また、グループ内外でのやり取りを通して、大学教育への考えについて考えを深めていたことも分かった。そして、学生が考える「大学教育で調査すべき事項」として繰り返し挙がっていた事柄は、「知力のある学生の育成」、「多様性のある教育」、「異分野の学生との交流を増やす教育」、「グループ学習を通して受動的な講義を改善する」、「教室での指導法の改善」であった。

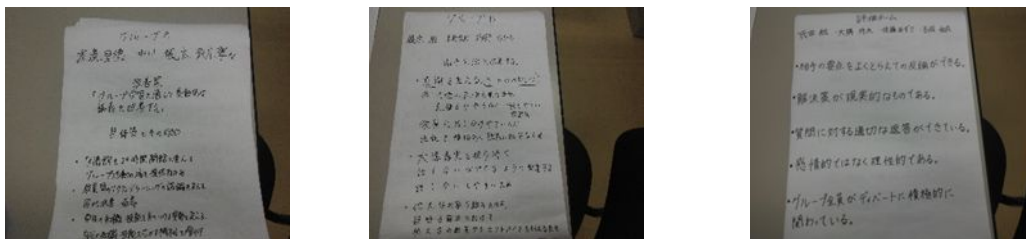


図1 グループの提案書の例

(3) 特定のテーマに焦点を当てた「学生の眼差し」の析出

大学授業、大学教育という幅広いテーマを対象とするのではなく、特定のテーマに焦点を当てた実践を流通科学大学の「教養演習」において行った。具体的には、「高大接続」を取り上げ、学部1年生を対象に、現在の入学者選抜方式に対する彼らの視点や考えを析出した。方法としては、学生の経験した入学者選抜方式に基づいて7つのグループを作り、個人でレポート作成、グループでポスター作成を行うよう要求し、それらを分析することで、現行の入学者選抜方式に対する「学生の眼差し」を析出した。そして、「大学での能動的な学習への円滑な適応を促す入試にする」、「推薦系入試の面接と一般入試の筆記試験は長所・短所が対称的である」、「多様性のある推薦系入試の面接の方法・内容」、「一般入試の筆記試験における受験回数・科目数」という4つの「調査事項」を得た。図2は、学生が考えた「現在の大学入試における調査事項」の発表場面の様子である。



図2 学生が考える「現在の大学入試における調査事項」の発表場面

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計4件)

1. 辻 高明「大学入試に対する『学生のまなざし』の分析 - 大学入学後の振り返りを通して - 」流通科学大学高等教育推進センター紀要4号, pp:57-69 2019年, 査読無.
<https://ci.nii.ac.jp/naid/120006604931>
2. 辻 高明「アクティブラーニングにおける学生間の他者評価の諸相と機能」, 秋田大学評価センター年報・研究紀要, pp:37-42, 2017年, 査読無.
<http://doi.org/10.20569/00003255>
3. 辻 高明「教養教育におけるディベートの設計と実践」, 秋田大学教養基礎教育研究年報 19

号, pp: 83-92, 2017 年, 査読無 .
<http://doi.org/10.20569/00003271>

4. 辻 高明「大学院生の評価・分析リテラシーを育成するアクティブラーニング」, 秋田大学評価センター年報・研究紀要, pp:35-45, 2016 年, 査読無 .
<https://ci.nii.ac.jp/naid/120005744132>

〔学会発表〕(計 2 件)

1. 辻 高明「評価・分析リテラシー向上のためのブレ FD の試み」日本教育工学会第 32 回全国大会, 大阪大学, 2016 年 .
2. 辻 高明「学生コースバトル - 授業評価をゲームで - 」日本教育工学会第 32 回全国大会, 大阪大学, 2016 年 .